

考えを伝えることはなぜ重要か？

－鈴木章宏先生「自分の考えを伝えられる子どもの育成を目指して」へのコメント－

広島大学 影山和也

「生涯学習社会」などといわれるようになって久しいが、義務教育の果たすべき役割は、教育に携わるあらゆる階層の人々に常に問われ続けねばならない。なぜ思考力や表現力の育成がこれほどまでに強調されるのか、それを受けて算数・数学科でできることは何か。本実践研究の主題に「自分の考えを伝えられる子どもの育成」を設定することの、「内容の定着」（仮説1）以外の教育上の理由はより深く議論されてもよいであろう。ここの検討がなければ、【目指す子どもの姿】とは、単にたくさんしゃべる子どものことか？という批判に応えられない。

自分の考えを伝えるとき、少なくとも(1)伝える内容と、(2)伝える方法とが検討されねばならない。言語技術と銘打って、「結論を先に言って、あとから「なぜならば」を言いましょう」という指導が昔にあるが、それは強いて言うならば(2)への応えである。しかしながら、本実践で報告された子どもの変化を眺めるだけでも、算数・数学科ではこれほど単純に「考えを伝える」ことは概括され得ないことが分かる。たとえば、【(…)数の大きさ比べの授業記録】にある、C13の発言「0.8ℓは1ℓもないけど、1.6ℓは1ℓあるからです」は、(1)1.6ℓのほうが0.8ℓより大きいことを、(2)1ℓ（絶対的大きさ）を基準にして伝えようとしている。説明の際に、全体で共有されている事柄や考察上の基準を明確にすることは、より評価されるべき（算数的）言語技術ではないか？こうした「型」の直接指導は必ずしもうまくいかないという研究報告もあるが、少なくとも教師の側で望ましい子どもの姿を具体的に、指導内容に即して明確にしておかなければ指導があいまいになり、上記「たくさんしゃべる～」をよしとする価値観を教室に植え付けかねない。

本実践研究はおそらく現在進行形であって、今後も様々な発展が期待される。また考えを伝える指導をスモールステップにして、一定の成果を挙げていることは注目されてよいかもしれない。算数・数学的思考や活動に占める子どもの信念の割合は決して小さくない。「うまくまとまっていなことは話したくない」「発表して間違っていたら嫌」という感情を和らげるために取ったであろう、皆で学習した事項を伝える内容にすること（手立て1）からは、今後、説明の仕方はどうであったか？という上記(2)の議論に進む可能性がある。また、説明する相手を少数にしほり、後に学級全体に移行することは（手立て3）、算数・数学科における表現力とは将来的に、古今東西の不特定多数の他者を相手にするのだ、ということ教えることになるであろう。特に後者について、考えを伝える「相手」が意識されたときに、そして伝えた相手からの反応を自分自身に取り込もうとする態度を身に付けたときにはじめて、算数・数学だけではなく子ども自身も常に批判にさらされて成長していく存在であるという理解につながる。他者を意識することは「生涯学習社会」に限らず21世紀社会を生き抜く基本的な資質の1つであろうし、義務教育段階で培うべき基本的態度であるように思われるが、いかがであろうか。